

Column

ホタルの生態と 人とのつながり

日本で代表的なホタルはゲンジボタルとヘイケボタルですが、町内でみられる多くはゲンジボタルです。オスよりメスの方が大きく、オスのおしりの光る部分は2節ありますがメスは1節。光を明滅しながら飛びまわっているのがオスで、草や木の葉の上で弱く光っているのはだいたいがメスです。この光が出会いの信号となり、やがて交尾をします。ゲンジボタルの幼虫の食べ物水底にすむ巻き貝「カワニナ」です。食欲はとても旺盛で、口から消化液をだし、カワニナの肉をとくとして吸います。幼虫の時代に食べるカワニナの数はおよそ25匹程度といわれています。

ホタルが棲息するには、カワニナが豊富で草木と土があり、夜真暗になるなどの条件があります。ホタルは環境の変化に敏感なので人間の手が入ることで姿を消してしまう恐れがあります。ホタルが棲みやすい環境だと云えるのです。



↑今年は例年より多く飛んだ福智川、町内には激減した箇所もあります。



←6月16日に行われた伊方小学校4年生のホタル観察会。

子どもたちに、自然の不思議さを伝えたいとの思いから、方城ほたるの会は、平成13年5月に弁城川のほとりで発足しました。代表は、筑豊で3人しかいない環境省認定の環境カウンセラーの中尾明子さん（弁城迫）。会には地元のかたや筑豊ゼミ・環境分科会のメンバーなど20人が参加しています。「観螢会」の開催や会報「螢」とメール」での情報発信をはじめ、生態観察、水質調査、川の清掃、環境への提言を行っています。また、町内や飯塚市、宮若市などでの小学校でホタルの観察会や勉強会のアドバイザーとして、さらに遠

めたり、いたずらするような悲しいことは絶対にやめて欲しい」と藤本さん。なかには針にパンをつけてカモを釣る人や猟犬に追わせる人もいます。藤本さんがカモに絡まった釣り糸をとってあげることもしばしばです。子どもから「カモおじさん」と呼ばれている藤本さん。雨や台風、盆正月も世話を欠かしません。藤本さんにとって孫のような存在のアイガモたちです。



↑6月11日に直方市で行われた活動報告会、今年のホタルの現状についても話がはずみました。

サケの稚魚放流、河川保護の看板設置、小中学校の総合学習に積極的にいかかわるなど、身近な川づくりに携わってきました。河川敷の清掃は、それらの活動のベースとして、毎月1回第2土曜日に開催されています。会長の大久保琢磨さん（赤池猿畑）は「この活動は地道で小さな行為かもしれませんが、黙々と続けることに意義があると思います。その姿を見ていただくことで、川に気づき、川を守る意識が少しでも高まればと、無理のないペースで頑張っています」と継続の大切さを語ります。大久保さんは田川ふるさと川づくり交流会の会長、遠賀川流域住民の会の理事としても活動し、それらの会と連携した取り組みも積極的に進めています。今回、地道な活動が評価され、



↑九州から1団体の推薦を受け、5月22日に東京都で表彰された夢の会。大久保琢磨会長（右）が浦田弘二町長に報告。

**ホタルが教えてくれること
を伝える 方城ほたるの会**

賀川流域ホタルサミットや福岡県環境教育学会でも発表するなど、幅広く活動しています。「川は大地にはりめぐらされた血管。水は人の心を映す鏡。そして、ホタルと人、川と里山のつながりの中で生きる多様な生き物たちの繊細なバランスを知ることは、人が自然と折り合いをつけて暮らしていく方向を教えてください」と代表の中尾さん。ホタルの飛ぶ姿がありふれた風景であってほしいと願いつつ、子どもたちが身近な自然の素晴らしさを実感できるような取り組みを目指しています。

夢の会は、(財)日本河川協会から本年度の河川功労者として表彰されました。今や会員は75人、流域屈指の会として成長し、年々会員数は増え続けています。「上流の関心が高まればゴミは減る。まずこの町から減らしていきたい」と、会員のみなさんは意欲満々です。



Hikangawata

に集う

川を愛し、川に感謝し、川を見つめる。命の川と命ある生物を守り、育むためこのまちで活動する人たちがいます。



↑上野橋中央から河川敷に張った4本のワイヤに百匹の鯉のぼりが泳ぎます。ゆったりとした心安らぐ町の風景です。

アイガモ世話と清掃欠かさず 十年目の藤本昭さん

朝 7時 藤本昭さん（赤池猿畑）の笛が河川敷に響くと「グアッ、グアッ」という声を上げ、愛らしいアイガモたちが足元に近寄ってきます。警戒心の強いカモも藤本さんだけは特別。投げられたパンを「待ってました」とばかりについばみます。藤本さんにとってカモの世話と遊歩道の清掃は、今年で10年目を数える毎朝の日課。上野橋下のカモたちも笛の音を待っています。「わたしたちの心を癒してくれる水辺の動物です。どうか、かわいがって欲しいですね。いじ



↑上野橋下流でカモにエサをあたえる藤本さん。今は20羽ほどですが、冬場は渡り鳥が加わり100羽近くになります。

流域屈指の会に成長 ひこさんがわ夢の会

上 野橋から四方に広がって泳ぐ百匹の五月鯉、みなさんも存じますよね。ひこさんがわ夢の会が、川に目を向けてもらおうと、平成10年から行っている取り組みです。家庭に眠っている鯉のぼりを募集し、毎年4月上旬から5月中旬まで掲揚しています。河川敷に咲く菜の花の上を元氣よく泳ぐ鯉のぼりの姿は、春の風物詩として、すっかりこの町に定着しました。会の発足は、10年前の国土交通省（当時建設省）による上野橋下流の多自然型護岸工事がき



↑活動のペースは毎月1回のゴミ拾い。おそろいのユニフォームで手際よく作業を進めます。6月10日は38袋のゴミを収集。

つかけ。以来、整備された環境を守り、後世に残したいと、河川環境の保護を広く呼びかけてきました。水辺に親しむ目的で開いた「ひこさんがわ夢コンサート」をはじめ、河川敷活用夢プランの作成、四万十川などの先進地視察